

CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.37 - 2012年1月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



親 親愛なるサレジオ会員の皆さん、サレジオ・ミッションの友人の皆さん、

第25回サレジオ宣教の日2012のテーマは「イエスの物語を語る」、聖人ドン・ボスコ-教育者、司牧者、コミュニケーター、宣教師-の足跡にますます従う成長の機会になります。若者にイエスの物語を語る、それには皆が賛成するでしょう！しかし、いくつか疑問があります。どのように？いつ？どこで？

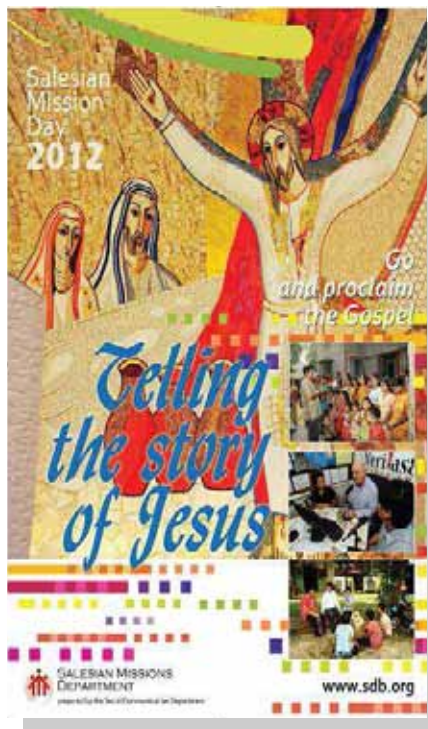
イエスでいっばいの心から、主について語る言葉が自然にあふれることを、私たちは知っています。

ドン・ボスコの子として、私たちはどこにいても告げ知らせるように呼ばれています。若者との教育的な出会いの場で、小さなキリスト者共同体で、ラジオやテレビを通して、インターネットで、ソーシャル・ネットワークやブログで、演劇や音楽によって。偉大な宣教師たちの豊かな創意工夫には、キリスト者でない人々に信仰を伝えるためにサレジオ会員たちが取り組んだあらゆる典型的な方法が見られます。第一次福音宣教によって生まれてわずか数十年の教会も多くあるアジアの若い教会は、イエスの物語を語るそのダイナミックな取り組みによって私たちにインスピレーションを与えてくれます！

Vicenzo Clemente
宣教師顧問
ヴァツラフ・クレメンテ神父

2012

なぜサレジオ宣教の日？



ま ず大事なものは、サレジオ宣教の日 (GMS) が、おもに各サレジオ会員と各支部・管区のサレジオ会共同体のためにあることを認識することです。

私たちサレジオ会員にとり、ドン・ボスコ生誕200周年の準備の期間は、ドン・ボスコの大いなるインスピレーション、深い動機、勇気ある選択、そして特にドン・ボスコの宣教の精神を再発見するようとの呼びかけです。そして、サレジオ会召命の本質的な次元である宣教の炎を再び燃え立たせ、保つのです。(会憲第30条)

大きな需要にもかかわらず、サレジオ会員の数が少ない今、会員や管区が自分たちの領域

の中に閉じこもる危険があります。使命を感じて外に目を向けることは、新たなエネルギーを必要とし、そのような力は持ち合わせていないと感じるからです。しかし、内に閉じこもることは、結果としてサレジオ会員として生きる使徒的情熱を失わせませす。若者たち、特に私たちのもとで召命の識別を行う若者たちは、その情熱を感じとります。

1988年以来、サレジオ会全体に向けて宣教のテーマが掲げられるようになりました。すべてのサレジオ会共同体が世界の特定の場所での宣教について知り、新たな状況に目を開き、内に閉じこもる誘惑を乗り越え、サレジオ会カリスマの世界的使命を思い、普遍教会の心、その中心でカリスマを十分に生きるためです。

この理由から、各管区・支部の会員、学校の生徒たち、職業訓練センター、小教区、オラトリオ、若者のグループ、サレジオ家族の宣教活性化のためにサレジオ宣教の日を祝うことが大切なのです。ドン・ボスコの宣教への熱意とサレジオのカリスマのダイナミックな活力を再発見するためです！

それは単発的な行事でも、折にふれて行われる活動でもなく、教育的・司牧的な歩みです。数週間をかけて行ったり、あるいは年間を通していくつかの取り組みを行ったりできます。宣教の日はその頂点になります。



私

は宣教師になることを望んでいましたが、その決断をするまで葛藤がありました。宣教師になれば、家族や友人と遠く離れて暮らさなければならないからです。しかし、ポスト・ノビスの終わりに、とうとう申請の手紙を書くことにしました。私の最大の望みは、サレジオ会員として受けた数々の祝福を神に感謝し、ドン・ボスコに感謝しながら、宣教地で人々のために生涯働きたいということでした。

私はザンビアに派遣され、2010年4月1日にこちらへやってきました。首都のルサカで数週間の準備期間を過ごした後、英語コースに通い始めました。ここではすべてが新しく、珍しく感じました。ある司祭叙階式で、これまででいちばん長いミサを体験しました。何と5時間！ 聖体拝領のときに皆が歌ったり踊ったりするのを見て、本当にびっくりしました。村の多くの若者たちが靴も履かずに

サッカーをし、ボールといえばビニール袋を集めて作ってあるのを見て、またびっくりしました。

今も自分が青二才の宣教師だと感じている私は、ますます多くの新しいことを学ぶのを楽しみにしています。今のところ、私にとっておもしろい挑戦は言葉です。ザンビアにはたくさんの言語があります。私が言っていることを分かってもらえないとき、人々の言うことが分からないとき、とても悲しくなります。若者は英語と地元の言葉を使います。私は若者たちの中において、孤独を感じるがよくありました。彼らは、私が全くわからない地元の言葉を好んで使うからです。

この困難のため、時につまらなくなり、宣教師になったのは正しい選択だったのかと自問することさえありました。しかし、仲間の宣教師や友人たちと自分の困難を分かち合うことによって、そのような疑いを乗り越えることができました。分かち合いを通して、一人ではないと気づきました。私たちは励ましあい、互いのために祈りあうことを続けています。

しかし、私の最大の力はイエスと話すこと、あるいはただ聖体の前に座ることでした。私の言いたいことや、困難、疑いをイエスは完全に理解してくれると分かっています。日々、助けてくださるようにと絶えずイエスに祈っています。問題や困難は相変わらずありますが、今、宣教の召命を歩み続けるために、私のエネルギーと動機はより強められ、深められたからです。また、私の両親や同級生、友人たちのような多くの人々の祈りが宣教召命を支えてくれていると私は信じています。そして、神様、聖母、ドン・ボスコがいつも共にいてくださることを確信しています！

私は、いのち、そして宣教召命の賜物を下された神様に感謝しつくせません。サレジオ会修道士としての召命をいつも支えてくれる両親に恩を感じています。宣教召命を生きる道を与えてくれた会に感謝しています！

ベトナム出身、ザンビアの宣教師 マルティン・マン・ヒエン・グエン修道士



サレジオ会の宣教の意向

2012年サレジオ宣教の日-イエスの物語を語る

2012年サレジオ宣教の日によって、世界中のサレジオ会管区で、イエスとの一人ひとりの出会いの体験を、創意工夫をもって若者たちと分かち合う機運が高まりますように。特に教会生活から遠く離れてしまっている若者、あるいは他の宗教の若者と分かち合うために。

2012年サレジオ宣教の日は、ヨハネ・パウロ二世の使徒的書簡「アジアにおける教会」20項の言葉からインスピレーションを与えられました。「イエス・キリストを告げ知らせるには、福音書がするように、イエスの生涯を語るのが最も効果的です。」これは、使徒、福音宣教師となる前に、福音化されたキリストの弟子となるようにとの招きです。福音化されてキリストの弟子となった使徒、福音宣教師は、教会の使命の中心で生きるサレジオ会の宣教の物語を語り継ぎます。したがって、2012年サレジオ宣教の日は、ますます普遍教会の中心で生きるようにとの招きです。

